

糖尿病患者のQOL向上

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 123 》

「早くきれいに治す」をモットーに高度医療、急性期治療を行う山梨県立中央病院。本年度の平均在院日数は13日以下となり、退院後のケア、中でも外来での高度な医療の必要性が増している。同病院は本年度から外来の看護体制を強化し、内科外来に慢性疾患に精通した専門看護師、認定看護師を配置。糖尿病患者へのインスリンポンプ導入やフットケアなど、通院患者のQOL（生活の質）向上に努めている。

内科外来には年間約1800人の糖尿病患者が通院。このうち本年度は102人がインスリン療法を新たに始めた。インスリン療法には1日数回皮下に注

外来に専門看護師配置

入する注射のほか、携帯型の注入ポンプを用いて持続的に注入するポンプ療法がある。いずれも導入・管理には専門的な知識と技術を持つ看護師による説明やトレーニングが必要だ。慢性疾患看護専門看護師の須森末枝子副看護師長は「患者さんの生活背景を把握した上で血糖値の変動に対応している」と話す。インスリンポンプ療法は注射に比べて注入量を調整しやすく、生活スタイルに合わせた設定が可能。生活の自由度を高め、血糖コントロールがしやすくなるという。県内では3カ所で実施し、同病院では1型糖尿病患者を中心に2010年度から累

計20人が使用。昨年には血糖値測定も可能な最新型ポンプも導入し、患者の糖尿病コントロールに役立てている。

糖尿病患者は神経障害によって足の異常に気づきにくく、血流障害によって潰瘍や壊疽に進んでしまうこともあるという。同病院は12年から週1回、専門看護師によるフットケア外来を開設。患者に適したケアを提案するなど、慢性疾患ならではの「病気との上手な付き合い方」をアドバイスしている。

外来看護を統括する宮川香苗主任看護師長は「外来は病棟と生活をつなぐ場。地域の核病院として訪問看護師らと連携し、患者さんが安心して生活できるよう支えたい」と話している。Ⅱ次回は23日に掲載します

インスリンポンプの使い方を説明する須森末枝子副看護師長一甲府・県立中央病院



宮川 香苗
主任看護師長

須森末枝子
副看護師長